

日韓文化交流基金講演会「韓流小説を読む」（抄録）

世界的ベストセラーとなった申京淑の『母を
お願い』に続き、今年5月には孔枝泳の『トガニ』
が発刊されるなど、韓国文学が注目を集めてい
ます。文学にも韓流が定着するのか、まだあまり
知られていない韓国文学の現況を踏まえながら、
その魅力を文芸評論家としてもご活躍中の川村
湊法政大学国際文化学部教授に伺いました。



現代文学に描かれる家族の関係性

韓流というと、ドラマや映画、K-POPのイメージが強く、
まだ小説にまでは及んでいないのが実情です。ですが最近で
は出版社や翻訳者の方々の努力によって、少しずつ文学の分
野にも韓流が広がっています。最近出版されたもののなか
でも、申京淑シンギョンスクと孔枝泳コンジヨンは韓国だけでなく日本や他の国でも
高い評価を受けています。

昨年、国際ペンクラブの獄中作家委員会で、死刑について
考えるというテーマの大会を催しました。ゲストに孔枝泳さん
を呼び、死刑、死刑廃止について話して頂きました。彼女は
『私たちの幸せな時間』（以下、『幸せな時間』と略）という死
刑囚と主人公の女性との一種の恋愛小説を書いています
が、どうしてこういう小説を書こうとしたのかということ
を話して頂いたのです。ちょうど日本では中村文則さんが
死刑執行人の苦悩を小説にしていたので、この二人を
ゲストとして呼びました。

孔さんはその後、『楽しい私の家』という作品を発表
していますが、これは『幸せな時間』とはまた違った
雰囲気、ちがうトーンで書かれています。これは孔
さんの私小説といっているでしょう。主人公は大学
受験を控えた娘。彼女から見た母や実の父、弟
たちの父親。孔さんは三回離婚して、子ども
たちはすべて父親がちがいますから、この小説
はまさに孔さん自身のことです。三回離婚とは
すごいことです。韓国は日本より家父長制的な
考えが強いから、三回も離婚したという、蔑
まれたり変な同情をされたりする。それを逆
手に取って、楽しい私の家といっているところ
に彼女の作家魂を感じます。

次に『トガニ』を読むとまた感じが違う。“学
園は欺瞞と倒錯のつぼだった”というキャッチ
コピーが目をつきます。聴覚障害児の学校で
起きた非人道的な事件を告発する意味で書
かれたのだと思います。『幸せな時間』が
死刑制度に対する社会への怒り、糾弾から書
かれているように、『トガニ』も一見民主主義
で豊かに見える韓国に、弱者を虐待する部分
があるということを告発しています。この三作
を続けて読むと、一方では社会派、一方では
私小説的という別のジャンルの小説を書いて
いるように見えますが、家族という視点で見て

くと、三作品は共通するものがあります。『幸
せな時間』の主人公の女性は家族のなかで孤
立した存在です。自殺未遂を繰り返す彼女
は家族社会からはみ出した存在として描か
れます。家族という関係性のなかで虐待さ
れているといってもいいでしょう。そこから
社会の秩序のなかの悪をあぶり出す、とい
うのが孔さんの小説の方法論ではないかと
思います。一方では暖かなヒューマニティ
のある作品を描き、一方では社会的な糾
弾、告発的なものを描いているように見え
ますが、その実、家族や文明化した社会の
課題、問題をはらんでいるのだと思いま
す。

韓国文学の紹介に尽力した安宇植氏

次に申京淑さんですが、彼女とは1995年の日韓文学シン
ポジウム以来のお付き合いです。このシンポジウムは、文芸
評論家で翻訳家としてもご活躍された安宇植アンウシクさんが、韓国
から作家を招へいして日本の作家との交流を企画されたこと
が発端となっています。その時に参加された中上健次さんが
定期的にやっという提案され、彼の死後、その意思を継
いで始まったのがこのシンポジウムです。95年には島根で
開催されました。安宇植さんはその頃から申京淑さんの
作品を日本に紹介したいということで、出版社に働きかけたり
しておられました。それが実って長編『離れ部屋』が集英社
から出まして、今回『母をお願い』が出たのですが、刊行
される前に亡くなられました。申さんに限らず、韓国の現代
文学を日本に紹介、出版することへの安さんの努力と功績は
非常に大きかったといえるでしょう。韓国文学がブームと
まではいえなくても、本格的に紹介されるようになったこの
時期に、彼を失ったのは大変な痛手だと思います。

それ以前の話をする、韓国の現代文学が翻訳されるよ
うになったのは、中上健次さんの尽力で新潮社から『韓国
現代文学13人集』『韓国現代短編小説』などが出来たから
です。安さんも翻訳家として参加されました。そこから
韓国に現代文学があると日本で認識されるようになったのだ
と思います。それより前は岩波文庫で短編小説集がありま
すが、韓国文学者の長璋吉チョンギョクさんなどが訳されたもので、日本
でいうと近代文学にあたります。戦後の文学に関しては
あまり紹介されてき

ファンソギョン
ませんでした。私もお手伝いした『太白山脈』や黄皙暎さんの小説などの現代小説はありましたが、革命、虐殺、闘争など波乱万丈で長いし暗い。これらも韓国の現代史や思想の流れを知るために、紹介する意味はありますが、『太白山脈』10巻はさすがに心構えをしないと読めません。

読者を共感させる家族の描き方

安さんは申京淑さんの本を滑らかで柔らかな文体で読みやすく翻訳しています。今、韓国文学のブームがあるとしたら、先鞭をつけた人だといっていいでしょう。彼が最後に残してくれたのが、『母をお願い』です。ソウル駅で母親が行方不明になる話で、子どもたちが母を探して歩く。これを読んだ時、韓国の家族崩壊がここまで進んでいるのかと、ここまで書いてもいいのかと心配になったほどです。韓国の家族の儒教的な絆の強さを知っている者としては、母がいなくなったのに普通の生活が続けられるなど、ありえない気がしました。年老いた母がいなくなるという作品を書いたということ自体が、ある意味衝撃的だったと思います。『母をお願い』申京淑著／安宇植訳（集英社）



孔さんの作品でもそうですが、さまざまなかたちで韓国社会では家族の形、あり方が変わってきているように思います。日本ももちろんそうです。最近になって、日韓の現代小説が呼応し合っているのではと感ずることが多くなってきています。

韓国では日本の小説が人気で、村上春樹は全作品といえるほど翻訳されています。大きな書店に行くと日本の小説が平積みになっていて、コーナーまであります。日本で出版されると同時発売に近いほどすぐに翻訳が出ています。吉本ばなな、江國香織などが人気で、読者層は若い女性が多いと聞いています。彼女たちは、まるで自分のことが書かれているようだ、と口をそろえます。『ノルウェイの森（韓国では『喪失の時代』）』も自分のことのように共感している。韓国の小説にはそういう共感を抱けなかった。村上春樹を支持する若い世代にとって、韓国にはこれまで共感できる小説がなかったということです。

角田光代や吉本ばななにしても書かれている世界は狭いが、そこを丹念に、心の片隅の感情の揺れそのものを文体として書いています。そこが韓国で受け入れられた要因だと思われます。そんな時、孔さんや申さんが現れ、自分たちの生活の手の届く部分を掘り返し、なぞるような作品を書いて、韓国国内で現代小説として受け入れられた。『離れ部屋』はロングセラーになっています。『母をお願い』はアメリカでも読者を獲得しました。田舎から出てきた母が迷子になるという物語は韓国的な気がしますが、アメリカでも日本でも自分のことのように受け止めて読む読者が存在するんですね。親との関係、家族の在り方、兄弟との関わり方を考えさせるといったらい

いでしょうか。これを読まれた方はこれは東京でもどこでも起こりうる、家族というのはもろい形でしかつながないことを改めて思い起こさせられたのではないのでしょうか。

韓流小説としてこの二人の作品が読まれているとしたら、韓国でも日本でもアメリカでも、家族という自分たちの基盤になる人間関係を丁寧に掘り返し、改めて考えさせる部分が二人の作家のなかにあるからではないのでしょうか。

韓国文学の新たな息吹

イスンツ
一方、李承雨さんの『生の裏面』という作品は哲学的で難解な小説です。すらすらとは読めませんが、ぐいぐいと読ませる小説です。父とは自分にとって誰であったか、というような、家族、親子を哲学的、宗教的なテーマとして取り上げています。スタイルは変わっていますが家族、親子と正面から取り組んだ作品であることは間違いありません。同じように家族を描いていても文体は申京淑さんとはまったく違います。その他にも最近ハ・ガンや80年生まれのカム・エランなど新しい作家がどんどん出てきています。ハ・ガンの『菜食主義者』は妻が突然ベジタリアンになるという小説で、その妻を巡る家族の困惑が描かれています。『楽しい私の家』や『母をお願い』には家族を思う愛情がありましたが、『菜食主義者』には娘に無理やり肉を食べさせようとする父親など、家族の恐ろしさが描かれます。村上春樹の作品に『眠り』というのがある、不眠に陥った妻を巡って夫婦が変化する恐ろしさが描かれています。『菜食主義者』を読むと、これまで韓国にはなかったということで受け入れられてきた村上春樹のような作品が、もう韓国にも出てきた、あるいはそれを越える作品が出てくるという兆しさえ感じさせます。このような作品が出てきますと、韓国文学を読む楽しさがますます高まっていく気がします。今後は日本人が読んでも共感できる作品がどんどん出てくるのではと期待しています。



『菜食主義者』ハ・ガン著／きむ ふな訳（クオン）

かわむら みなと
川村 湊

PROFILE

1951年生まれ。法政大学法学部政治学科卒。専門は、日本近現代文学、文芸評論、日韓比較民俗論。東亜大学校（韓国）助教授、法政大学第一教養部助教授等を経て、1999年より現職。

1980年『異様（ことよう）なるものをめぐって—徒然草論』で群像新人文芸賞を受賞。2004年『補陀落——観音信仰への旅』で伊藤整文学賞。2007年『牛頭天王と蘇民将来伝説』第59回読売文学賞「随筆・紀行賞」受賞。著書に、『生まれたらそこがふるさと——在日朝鮮人文学論』（平凡社、1999年）、『思想読本（6）韓国』（作品社、2002年）、『アリアン坂のシネマ通り 韓国映画史を歩く』（集英社、2005年）他多数。